

<2017年1月 月例会報告>

NPO サロンの事業を考える① —公開シンポジウム—

中塚 義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高等学校)

【日 時】2017年1月24日(火) 19:15~21:10 (終了後は「景宜軒」~23:30頃)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】NPO サロンの事業を考える①—公開シンポジウム

【演 者】中塚義実 (NPO 法人サロン 2002 理事長/筑波大学附属高校) ほか

【参加者 (会員・メンバー) 11 名】

安藤裕一 (GMSS ヒューマンラボ)、春日大樹 (筑波大学大学院)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、小池正通 ((株)La Esperanza)、小山基彰 (ヒーローインタビュー)、笹原勉 (日揮(株))、関谷綾子 (関谷法律事務所)、茅野英一 (帝京大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷区サッカー協会)、守屋佐栄 (2017 は UAE、イラン、サウジに行く予定)

【参加者 (未会員) 0 名】

【報告書作成者】中塚義実

目 次

1. サロン 2002 と公開シンポジウム

- 1) コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム (2001)
- 2) ワールドカップ総括シンポジウム (2002)
- 3) 2003 年度からの「公開シンポジウム」

2. 公開シンポジウム 2016 「日本サッカーのルーツを語ろう！」

- 1) 準備段階
- 2) シンポジウム概要
- 3) シンポジウムの運営
- 4) 報告書について

3. これからの「公開シンポジウム」

はじめに

1997年4月より「サロン2002」を名乗るようになって今年で20年。節目の年にあたり、月例会でもNPOサロンの事業を振り返り、今後について意見交換する場を設けたいと思います。

今回はその第一弾。「公開シンポジウム」を取り上げます。

1. サロン 2002 と公開シンポジウム

サロン 2002 にとって最初の公開シンポジウムは、2001 年度の「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」であった。2016 年末の「日本サッカーのルーツを語ろう」まで、そのときどきのテーマ設定と内容は次の表にあるとおりである。

ところどころ「出張サロン」も絡めて開催していることがわかる。

サロン2002公開シンポジウム一覧(2001～2016)			
			2017.1.24.
年度	期日	会場	テ ー マ (演者)
2001	2001.7.22.	横浜国際総合競技場	コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム 長岡茂、竹原典子、小島裕範
2002	2002.8.3.	東京体育館	ワールドカップ総括シンポジウムⅠ-「ささえる物語」を中心に 長岡茂、村林裕、宮城島清也
	2002.8.10.	神戸ファッション美術館	ワールドカップ総括シンポジウムⅡ-「観戦と交流の物語」を中心に 賀川浩、スー木下、橋本潤子、宇都宮徹吉
2003	2003.8.2.	東京体育館	2003公開シンポジウム 「地域で育てるこれからのスポーツ環境」 中塚義実、宇都宮徹吉、山下則之
2004	2004.11.27.	立教大学	2004公開シンポジウム 「totoを活かそう！-地域スポーツ振興のために」 福西達男、高橋正紀、徳田仁、両角晶仁
2005	2005.11.12.	味の素スタジアム	2005公開シンポジウム 「クラマーさんありがとう！」 D.クラマー、賀川浩、両角晶仁、大橋二郎、中塚義実
2006	2007.3.24.	日産スタジアム内	2006公開シンポジウム 「2006年 ドイツで感じたこと」 池田誠剛、庄司悟、徳田仁
2007	2007.12.15.	青学会館アビーホール	2007公開シンポジウム 「サッカー観戦を楽しもう！-スタジアム編」 仲澤真、徳田仁、宮明透
2008	2009.1.31.	日本青年館・会議室	2008公開シンポジウム 「地域からみたJリーグ百年構想」 宇都宮徹吉、宮明透、守屋実
	2009.3.21.	那智勝浦町体育文化会館	日本サッカー史シンポジウム 「中村覚之助と日本サッカーの夜明け」 牛木素吉郎、森岡理右、山本殖生、中塚義実
2009	2010.2.6.	オリンピック記念青少年総合センター	東京シンポジウム 「日本サッカーの始祖 熊野の中村覚之助」 中村統太郎、真田久、加藤弘、中塚義実
	2010.3.6.	青学会館アビーホール	2009公開シンポジウム 「2019ラグビー・ワールドカップ日本大会を語ろう！」 岩淵健輔、直江光信、島田佳代子
2010	2011.3.5.	堺市立ナショナルレセン	2010公開シンポジウム=デンソーシンポジウム 「育成期のサッカーを語ろう！」 上田亮三郎、松田保、黒田和生、関塚隆
2011	2012.3.4.	味の素スタジアム	2011公開シンポジウム 「『高校サッカー90年史』を語ろう！」 北原由、牛木素吉郎、賀川浩、中塚義実
2012	2013.3.23.	臼杵市民会館小ホール	サロンin臼杵「竹腰重丸を語る」 浅見俊雄、牛木素吉郎、吉田稔、中塚義実
	2013.3.30.	テバ・オーシャンアリーナ	2012公開シンポジウム 「U-18フットサル」を語ろう！ 松崎康弘、大立目佳久、岩本芳久、中塚義実
2013	2014.3.30.	筑波大学東京キャンパス	2013公開シンポジウム 「スポーツクラブの法人化を語ろう！」 賀川浩、黒崎祐一、水上博司、中塚義実
2015	2015.7.4.	筑波大学東京キャンパス	2015公開シンポジウム 「スポーツで“ゆたかな暮らし”を！」 村松邦子、山口拓、小林洋平、岸卓巨
2016	2016.12.17.	桐蔭会館	2016公開シンポジウム 「日本サッカーのルーツを語ろう！」 -東京高等師範学校の足跡を中心に」 真田久、賀川浩、牛木素吉郎、中塚義実
注1)	「日本サッカー史シンポジウム」は、筑波大学蹴球部同窓会若友サッカークラブと日本サッカー史研究会が主催し、サロン2002が協力。「東京シンポジウム」は、熊野三山協議会主催、サロン2002は共催した。		
注2)	「デンソーシンポジウム(2010公開シンポジウム)」は、株式会社デンソーの特別協賛のもと、(財)日本サッカー協会、全日本大学サッカー連盟、デンソーカップ実行委員会とサロン2002が主催した。		
注3)	「竹腰重丸を語る」は、サロン2002が主催する「サロンin臼杵」として開催。臼杵市、臼杵市体育協会、臼杵市教育委員会、日本サッカー史研究会、一般社団法人東大LBC会、ビバサッカー研究会、臼杵市サッカー協会、社団法人大分県サッカー協会の後援、また地元の多くの企業の協賛を得て開催した。		

1) コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム (2001)

「スポーツを通しのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げるサロン2002にとって、「2002年FIFAワールドカップ」は、大変大きなイベントとして認識していた。2002年以降にどうつなげるかがより重要であるという立場ではあったが、この世界的イベントをホスト国としてどう受け入れ、盛り上げるか、当事者として自分たちにできることは何かを考える場として、「ワールドカッププロジェクト1」を立ち上げた。

当時から、「月例会は、何らかの結論や方向性を示す場ではない。あくまでも自由な意見交換の場である」というのが前提であり、「何らかの結論を出して行動に移したい場合は、プロジェクトチームをつくり、行動につなげる」ことにしていた。

サロン2002の最初のプロジェクトは「フットサルプロジェクト」であり、ワールドカッププロジェクトはそれに続くものであった。

プロジェクト1の結論として出てきたのが公開型のシンポジウム開催である。2001年に国内3カ所で開催されたコンフェデレーションズカップを取り上げ、各地で様々な形で関わる演者にご登壇いただいた。シンポジウムは、人と情報が行きかう場であり、終了後の懇親会を含め、“同志”が出会うことで相乗効果が生まれることを期待した。実際にこのシンポジウムでつながった人たちが、2002年とその先にさまざまな成果をもたらした。

シンポジウムの内容は後日報告書にまとめ、より多くの方に伝えることを目標とした。報告書には「寄稿編」を設け、さらにJAWOCで大会運営に深く関わる鈴木徳昭氏へのインタビューを試み「インタビュー編」として掲載した。このインタビューは、活字になった部分だけでも面白いが、活字にできなかった話も含め、大変興味深いものであった。このときの報告書は600部作成し、JFAやJAWOC、

別紙2：ワールドカップ・プロジェクト1立ち上げ宣言

2001.5.8.

ワールドカップ・プロジェクト1(ワン)

ーコンフェデ杯から何かを残そうプロジェクト(仮称)の提案

<発起人>

笹原勉(日揮/横浜市市民)
竹原典子(浦和レッズスチュワード/Jリーグボランティアネットワーク発起人)
中塚義実(筑波大学附属高校/サロン2002代表)

サロン2002の“志”にあるように、私たちは「“志”を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国/日本大会は大きな節目であると認識」しています。個々の会員は、それぞれの持ち場で様々な活動を展開していますが、これまでのところ、組織としてのサロン2002は、具体的な活動に取り組みないまま今日に至っています。

この5～6月に、ワールドカップのプレ大会としてのコンフェデレーションズカップが開催されます。サロンの会員にも関係者が何人かいます。この大会をきちんと総括し、本番に経験を生かすことは、組織としてのサロン2002が取り組むべき活動と考え、ここに「プレ大会から何かを残そうプロジェクト(仮称)」の立ち上げを提案致します。

<プロジェクト立ち上げの動機>

FIFA主催の公式戦は、ワールドカップまでにはコンフェデレーションズカップの他にはありません。その貴重な経験を積めるのは、鹿嶋、新潟、横浜の3会場に限られており、しかも各会場における成果と課題がどの程度総括、記録され、全国に公開されるのか未定数であるのが現状です。プレ大会で得られた知見を整理し、共有することが不可欠であると感じます。

<本プロジェクトの目的と具体的課題>

動機にあるように、ワールドカップのプレ大会であるコンフェデレーションズカップで得られた知見を整理、共有し、国内におけるワールドカップ準備を再構築する判断材料を得、全国的な気運を盛り上げることが目的です。具体的には以下の2つの課題に取り組みます。

1. コンフェデレーションズカップ開催地における準備等諸活動の検討、反省、総括
そのために、「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を7月末(7月22日が第一候補)に開催する。鹿嶋、新潟、横浜の事例をもとに検討
2. 試合開催地が得た情報・経験を全国各地へ発信
そのために、上記1を含めた「コンフェデレーションズカップ総括報告書」を作成し、ワールドカップ開催自治体、JAWOC、FA、ボランティア組織、市民活動組織等に配布する
また、シンポジウムの様子や報告書の内容は、各メディアを通して積極的に配信する

<活動期間> 2001年5月～8月

<プロジェクトの発展性>

「ワールドカッププロジェクト」には今後も継続して、様々な角度から取り組んでいきたい。それは、「この世界的イベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する」という「サロン2002の“志”」に沿った活動でもある。

今回得たノウハウや人脈を、各開催地でされるワールドカップ関連イベントやワールドカップ本番に生かしたり、Jリーグのボランティア組織等や市民団体等の、サッカー・スポーツをささえる組織に蓄積することで、ワールドカップ以降の“ゆたかなくらしづくり”に貢献し得る。

以上

47 都道府県サッカー協会や開催自治体、公認キャンプ候補自治体など、関係する諸機関に無料で配布し、活用してもらおうとした。

かなり大規模なシンポジウムと報告書作成・配布事業であったが、全体を通して「黒字」であった。シンポジウムの運営は参加者からの参加費で、報告書は個人や団体からの賛助金で作成するという、各事業独立採算の方針はこのときからいまに至るまで変わらない。FIFA ワールドカップへ向けての機運があったからか、多くの参加者と賛助金を集めることができた。

ワールドカップ・プロジェクト1:会計報告			
<シンポジウム関係>			2001.7.23.
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
参加費(@1000×85)	85,000	会場使用料	23,100
		講師謝礼・交通費	57,100
収入合計	85,000	支出合計	80,200
残金 4,800円は報告書会計に組み入れ			
<報告書関係>			2002.4.8.
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
シンポジウム残金	4,800	報告書印刷費(800冊)	236,000
賛助金(団体)	160,000	角二封筒(300枚)	6,000
50,000×1(とさ千里)+30,000×3(Alliance2002、FC東京、DUOリーグ)+20,000×1(三ヶ日整形外科)		発送手数料	10,000
賛助金(個人)	66,000	消費税(5%)	12,600
10,000×5(浅野智嗣、安藤裕一、北岡真幸、久保田淳、小緑典子)+6,000×1(坂下佳宏)+5,000×1(井上裕康)+5,000(堀美和子)			
報告書売り上げ(11月7日入金)	19,500	宅急便・郵便局送料	63,720
報告書売り上げ(2月13日入金)	12,500		
報告書売り上げ(2月20日入金)	11,500		
報告書売り上げ(4月8日入金)	6,500		
利息	19		
プロジェクト補助(全体会計より)	50,000		
収入合計	330,819	計	328,320
残金2,499円は、ワールドカップ・プロジェクトⅡへ繰越し			

関係各位

2001.6.25.

コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム開催について

サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする異業種ネットワーク「サロン 2002」では、このたび、コンフェデレーションズカップの成果と課題を2002年 FIFA ワールドカップ大会™へとつなげるために、「サロン 2002 ワールドカッププロジェクト 1」を立ち上げ、その一環として「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」を開催することとなりました。

FIFA 主催の公式戦であるコンフェデレーションズカップを開催地として経験できるのは、鹿嶋、新潟、横浜の3会場に限られます。各会場では、運営側、ボランティア側、あるいは市民の側から、様々な成果や課題が提示されることでしょう。ここで得られた知見を総括し、他地域と共有することによってはじめて、同大会の成果が、2002年につながるものと考えます。シンポジウムを開催して報告書を作成し、関係自治体、JAWOC、FA はじめ、ワールドカップをささえる様々な団体にご活用いただくと考えたのはこのような主旨からであり、それが、2002年の成功、及び2002年以降のゆたかなくらしづくりに貢献するものと考えます。

このような主旨で開催される標記シンポジウムには是非多くの方にご参集いただきますようよろしくお願い申し上げます。なお、主催団体である「サロン 2002」及び「サロン 2002 ワールドカッププロジェクト 1」については、別紙をご参照ください。

記

開催日時 2001(平成13)年7月22日(日) 13:00~16:30(12:30受付開始)
 会場 横浜市スポーツ医・科学センター大研修室
 〒222-0036 港北区小机町3302-5 横浜国際総合競技場内地下
 JR横浜線・市営地下鉄線 新横浜駅下車徒歩15分、JR横浜線 小机駅下車徒歩10分
 (駐車場が限られているので、車での来場はご遠慮ください)

内容及び演者

運営側からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	長岡茂(JAWOC茨城支部)
ボランティアからみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	竹原典子(横浜会場ボランティア参加者)
市民団体からみたコンフェデレーションズカップの成果と課題	小島裕範(Alliance2002(新潟)代表)
司会進行	中塚義実(サロン2002代表)

主催 サロン2002

後援 Alliance2002 NPO法人日本サポーター協会

運営 サロン2002ワールドカッププロジェクト1

参加申込 下記事務局まで、氏名・所属(差し支えなければ)・連絡先(TEL/FAX/Email)を明記の上、EmailまたはFAXでお申し込みください。

参加費 1000円。当日、会場で徴収させていただきます

運営事務局 笹原勉 FAX: 045-754-3710 Email: thsasa@yhb.att.ne.jp

注)「賛助金」のお願い

報告書は、主旨に賛同してくださる個人または団体からの「賛助金」で作成いたします。「賛助金」は一口5,000円とし、拠出していただいた方のお名前を報告書に掲載させていただくことで、賛助の気持ちに応えたいと思います。

さらに、4口(2万円)以上の「賛助金」をいただいた個人や団体には、報告書への広告掲載も可能とさせていただきます。大きさの目安は以下の通りです。

A4版1ページ(表紙裏、裏表紙裏)...	5万円以上
A4版1ページ(その他のページ)	5万円
A4版1/2ページ	3万円
A4版1/3ページ	2万円

「賛助金」をお出しいただける個人または団体は、事務局へご連絡いただいた上で、下記口座へお振込みください。よろしくお願い申し上げます。

富士銀行板橋支店 2076207 サロン2002プロジェクト代表中塚義実

報告書送付先(贈呈分)一覧						2001.9.27.	
文書No	送付先グループ	件数	冊数	計	小計	配布方法	備考
1	JAWOC本部	1	20	20		9月18日に持参	17部署あり
1	JAWOC支部	10	3	30		三栄社から郵送	
1	開催自治体	10	2	20		三栄社から郵送	
2	日本サッカー協会役員・理事	34	1	34		三栄社から郵送	
2	日本サッカー協会事務局	1	5	5		三栄社から郵送	
3	都道府県サッカー協会	47	2	94		三栄社から郵送	『フットサル連盟は必要か』同封
4	日本プロサッカーリーグ	1	5	5		三栄社から郵送	
4	Jクラブ	28	2	56		磐田・鹿島・神戸は手渡し。その他は三栄社から郵送	ベガルタ仙台、セレッソ大阪は2件(OSC含む)
5	Jボランティア	30	2	60			
				324			
6	公認キャンプ候補地	80	2	160		三栄社から郵送	84立候補から4自治体は辞退
				160			
7	演者・事務局	5	2	10		「関係各位への配布」参照	長岡、竹原、小島、中塚、笹原
7	賛助者(個人)	8	2	16			浅野、安藤、井上、北岡、久保田、小緑、坂下、堀
7	賛助者(団体)	5	3	15+2			とさ千里、FC東京、DUOリーグ、Alliance2002、三田市整形外科(5冊)
7	後援団体	3	2	6			Alliance2002、JSA、ソシオ・フリエスタ
7	寄稿者	8	2	16			小島、浅野、数、片岡、村坂、湯浅、宇都宮、ボランティア編集部
7	インタビュー協力	4	1	4			鈴木(崇)、鈴木(徳)、江川、野上
7	スタッフ	10	1	10			梅本、鈴木(崇)、数、小出、五香、麻生、宮崎、山田、鶴野、岡橋、
				79			
				563			
	(J青年会議所)	28	0	0			
	(J商工会議所)	28	0	0			
8	通信	2	1	2			共同、時事
8	新聞	10	1	10			朝日、毎日、読売、産経、日経、サンスポ、スポニチ、デイリー、日刊スポ、報知
8	テレビ	8	1	8			TBS、テレビ朝日、テレビ東京、日本衛星放送、日本テレビ放送網、日本放送協会、フジテレビジョン、スカイパーフェクTV
8	雑誌(サッカー専門誌)	4	1	4			JFAnews、サッカーマガジン、サッカーダイジェスト、ストライカー
8	インターネット	3	1	3			サッカークリック、FCJAPAN、スポナビ、
8	ジャーナリスト	6	1	6			大住良之、後藤健生、牛木素吉郎、賀川浩、セルジオ越後、玉木、
9	研究者	1	1	1			佐伯聰夫、
10	資料として寄贈	2	1	2			国会図書館、体協資料室
				36			
				599			

2) ワールドカップ総括シンポジウム (2002)

FIFA ワールドカップが6月30日に終了。総括シンポジウムを8月初旬に東京と神戸で開催した。東京では「ささえる物語」物語を、神戸では「観戦と交流の物語」を取り上げ、それぞれの分野でご活躍された方々が登壇した。報告書の寄稿編には、ルーマニアのキャンプを誘致しようとしていた岐阜県飛騨古川町（現飛騨市）からも原稿をいただき、貴重な活動の記録となった。

3) 2003年度からの「公開シンポジウム」

2002年 FIFA ワールドカップ後は、年1度のシンポジウムはそのときどきのトピックを追いながら、「スポーツを通してのゆたかな暮らし」を考える場となっていく。

2003年度は高校生年代のユースサッカーリーグ（DUO リーグ）など、地域におけるスポーツ振興の取り組みを紹介し、2004年度は地域スポーツの財政面での裏付けとしてのtotoの動きを取り上げた。内容的には充実していたが、告知や営業面で行き届かず、参加者数は通常の月例会とあまり変わらず20～30人程度であったのが惜しい。

2005年度はJFAの招待でデットマール・クラマー氏が来日されるタイミングで、「クラマーさんありがとう！」と題するシンポジウムを実施した。進行役の中塚は数日前に「ぎっくり腰」を患い、杖をついての登壇である。80歳を越えるクラマー氏に「君は病院へ行った方がよい」と慰められたのが、日本サッカーの父との初対面の思い出である。

2006年はドイツ大会の振り返り。発表者のプレゼン時間が大幅に伸びたことが思い出される。

2007年度の「サッカー観戦を楽しもう」では、シンポジウムの内容を、一般参加者が個人のブログで報告する事件が発生し、嚴重注意と削除・謝罪を求めた。SNSの普及とともに、情報管理の面で新たな時代に入ったことが感じられた。公開シンポジウムの内容は、サロン2002が責任を持って公開する。そのための速やかな報告書作成が求められる。

2008年度も地域スポーツを取り上げ、2009年度にはじめてラグビーを取り上げた。いまから思うと登壇者にはビッグネームが並んでいる。内容的にも充実したものであった。

2008～2009年度は、公開シンポジウムのほかに日本サッカー史に関するシンポジウムに、サロン2002が協力または共催の形で関わった。那智勝浦町で開かれた日本サッカー史シンポジウムは「出張サロン」でもあった。日本サッカーのルーツ校、東京高等師範学校の初代主将、中村覚之助を取り上げたものであり、これまで詳らかでなかったサッカー導入期のことがいろいろわかり、非常に刺激的なシンポジウムであった。2012年度末には大分県臼杵市で「出張サロン」を開き、当地で生まれた日本サッカーの偉人、竹腰重丸の功績を地元の方々に知っていただく場となった。ここでも新しい発見が数多くあった。

2010年度は月例会テーマに「育成期のサッカー」を掲げ、その集大成として公開シンポジウムでも取り上げることにした。演者として想定された方々がいずれも3月初めに堺市で開かれる大学サッカー地域選抜交流戦「デンソーカップ」に参加されることから、その付帯イベントとして、全日本大学サッカー連盟との共催で実施した。かなり大規模なイベントとなった。

2011年度は、ちょうど『高校サッカー90年史』の作成に取り組んでいたことがテーマ設定につながった。何度か取り上げていた日本サッカー史関係の成果を披露する場ともなった。

2012年度の「U-18 フットサルを語ろう」は、U-18 フットサルトーナメントが行われていたテバオーシャンアリーナの試合後のピッチに演者が登壇、参加者はスタンドという形で開かれた。このシンポジウムが引き金となって、U-18年代のフットサル全国大会が整備される歴史的シンポジウムとなった。JFA フットサル委員長とJFF専務理事が登壇し、現状と今後を共有できたことが大きい。

2013年度は、サロン2002自体が法人化へ向けて激しく動いていたところである。スポーツクラブの法人化は時代の要請であるとともに、サロン2002自体が直面する課題でもあった。2014年度は法人化へ向けての準備や調整のため公開シンポジウムを開催することはなかったが、2015年度、NPO法人として最初のシンポジウムはサロン2002の“志”を掲げて実施するものであった。

2. 公開シンポジウム 2016 「日本サッカーのルーツを語ろう！」

1) 準備段階

2016年度のシンポジウムは12月17日（土）、筑波大学附属中高敷地内にある「桐陰会館」で開かれた。終了後は同会場にてそのまま懇親会を開くということで準備を進めた。

大学、学校、保護者、同窓会の連携のもと建立された「桐陰会館」の完成報告会が開かれたのは、奇しくもシンポジウムの2年前、2014年12月17日のことである。それ以降、基本的には学校と同窓会関係にしか貸し出されなかったが、2016年度より「外部団体」への貸し出しがはじまり、NPO 法人サロン 2002 として会場確保に動いたのが7月末のこと。8月中旬に会場確保が決定し、少しずつ構想を練り、9月30日にはスポネットサロンメンバーに向けて次のメールを送信した。

スポネットサロンメンバー（含 NPO サロン会員）各位

今年度の公開シンポジウムの進捗状況報告とご意見伺いです。

すでに皆さまには「12月17日（土）の午後は、筑波大学附属高校敷地内にある桐陰会館にて公開シンポジウムです。テーマは「戦前の日本サッカーを語ろう（仮題）」。スケジュールをあけておいてください」と案内済みですが、そろそろ具体的な準備に取り掛かりたいと思います。

この企画の発端は、「筑波大学蹴球部創部 120 周年のタイミングで何かできないか」ということでした。加えて、「2018年は高校サッカー100周年」「2021年はJFA100周年」ということもあり、おそらく各方面で歴史の掘り起こし作業が進められていることでしょう。とくに「戦前（この表現が適切かどうかもご意見を）」については、あとになればなるほど「語り部」が減ってしまうので、早めに取り上げたいと考えた次第です。

大まかなイメージとしては、

1) 『あのひと、あのときーエピソードで綴る筑波大学蹴球部の120年』（10月末発刊予定）より、日本サッカーの導入期から大戦前の日本サッカーのあゆみを東京高師（含高師附）を中心に振り返る

【キーワード】坪井玄道、中村覚之助、YC&AC、「赴任地にゴールポストを」、極東選手権、ユース大会（招待大会）、JFA 創設、内野台嶺、新田純興、鈴木重義、チョウディン、等

2) 日本のスポーツを特徴づける「学校体育（体育の授業、体育的行事、運動部活動）」の源流である東京高師と嘉納治五郎の功績について振り返り、日本サッカー（スポーツ）界の「いま」につなげる

【キーワード】東京高師、嘉納治五郎、クーベルタン、オリimpiズム、日体協、金栗四三、留学生、大学昇格運動、大正デモクラシー、関東大震災、等

3) 東京以外の地域の展開例として、戦前の関西サッカーを取り上げる。とくに神戸・広島サッカーと外国人の関係等

【キーワード】KR&AC、日本フットボール大会、神戸一中、御影師範、チョウディン、河本春男、広島一中、同志社、明星、ドイツ軍捕虜、ロシア革命とチェコ軍、朝鮮半島、明治神宮大会、等

4) 戦前の日本サッカーを語る上でのトピック（今後の課題）

【キーワード】高橋忠次郎（日体大 OB）、丸亀高女（戦前の女子サッカー）、竹腰重丸、サッカー協会の組織改革（クーデター）、等

1) は中塚が話をします（30分ぐらいほしい）

2) は、筑波大学体育専門学群長でスポーツ史研究者の真田久氏に登壇依頼済

3) は、賀川浩さんにご登壇いただけないかと考えます。

4) は、牛木さんにご登壇いただき、幅広く議論するきっかけになればと考えます。

以上、本件についての第一案です。（略）10月中旬には大枠を固めたいと思います。

演者の内諾も得られ、内容面での調整をメール等で進めていった。また何度かシンポジウム担当者のミーティングを開き、運営面と内容面についての意見交換をした。

当初は「戦前の日本サッカーを語ろう（仮題）」だったテーマは「日本サッカーのルーツを語ろう」となり、「東京高等師範学校の足跡を中心に」をサブテーマとして焦点を明確化した。

また、以下の4団体に後援申請をし、大々的に告知することとした。

- ・筑波大学蹴球部同窓会若友サッカークラブ
- ・(公財) 日本サッカー協会
- ・日本サッカーミュージアム
- ・横浜カントリーアンドアスレチッククラブ (YC&AC)

通信社や新聞社へも案内を送り facebook も活用したが、告知についてはまだまだ改善の余地がある。

2) シンポジウム概要

オープニングで嘉納治五郎の紹介映像と日本サッカーのあゆみを振り返るスライドをみてシンポジウムはスタートした。BGM として用意したビートルズの「ヘイ・ジュード」がうまく流れなかったのは誤算であった（柔道と掛けたのだが…）。

総司会会は笹原勉。シンポジウムの進行は中塚義実。

まずは牛木素吉郎氏が「日本へのサッカーの移入」というテーマで約 25 分間、話をされた。大枠は、①日本のサッカーの始まりは東京高師の中村覚之助から。②日本のサッカーの普及は東京高師卒業生による。③学校によるスポーツ普及について、である。日本にサッカーが移入されたのは「1873（明治 6）年に海軍兵学寮（築地）で、ダグラス少佐が教える」のが最初だとされているが、その通説は「新田純興『日本サッカーの歩み』（講談社）によって広まる。その後の普及、発展にはつながっていない」と指摘。「サッカーの日本への本格的紹介は、明治中期以降（学校体育の教材として）。サッカーの試合が本格的に行われたのは 1904（明治 37）年の東京高師対横浜外人の試合以降」であることを強調され、その試合を企画した東京高師初代主将の中村覚之助の功績を紹介された。東京高師卒業生の赴任した中等学校、師範学校にサッカーが広まっていくが、「高師卒業生の赴任先指定が意図的であったのではないか。サッカー出身者は温暖な地方に着任し、バスケットボール出身者は体育館を設備した寒冷地（新潟など）に派遣したのでは？」との推測を述べられた。

続いて筑波大学体育専門学群長でスポーツ史研究者の真田久氏が、「嘉納治五郎校長時代の東京高師」についてスライドを用いて紹介された。柔道の創始者として知られる嘉納治五郎は、アジア初の IOC 委員であり、東京高等師範学校の校長を長く務めた教育者である。東京高師において、①体育科の設置（体育を他教科と同様の地位に高め、多くの指導者を輩出した）、②課外活動の奨励（学生自身のスポーツ活動を奨励。全国に部活動を広める礎を築いた）、③留学生の体育・スポーツを奨励（中国や朝鮮半島から多くの留学生を受け入れ、体育・スポーツに積極的に取り組ませた）の観点から嘉納校長の功績を紹介した。「高師の嘉納か、嘉納の高師か」と言われるほど、嘉納の教えが東京高師の学生に浸透し、日本の体育・スポーツ発展の源流となる。蹴球部ももちろんその流れを汲むものであるとのご指摘であった。

ここからは中塚がスライドを用いながら、東京高師卒業生の全国へのサッカー普及のあゆみ、そして戦前の日本サッカーの大まかなあゆみを、主に賀川浩氏とやり取りをしながら進めていった。

賀川氏は、①神戸のサッカーと河本春男先生（ユーハイム元社長。刈谷中から東京高師で主将を務め神戸一中に赴任した河本氏の下宿先は賀川さんのご近所。戦前の神戸一中の黄金期をささえた）、②ビルマからの留学生チョウディン（日本サッカーに「ショートパス」という技術革命をもたらした。早稲田を皮切りに全国各地でサッカー指導。戦前のレベルアップに貢献）、③朝鮮半島へのライバル意識（日本の植民地であったソウルやピョンヤンの学校とのライバル意識）、④戦前の日本代表チーム（1917年の極東選手権大会に東京高師メンバーで初参加。1930年の大会で初優勝。1936年ベルリン五輪をめぐる）などについて、ご自身の体験をもとに話をされた。このほか、日本サッカー協会創

設にまつわる話、中等学校の全国大会のことなど、話題は多岐に及ぶ。

戦後すぐの1946年5月5日、東大御殿下グラウンドで行われた全日本選手権決勝で東大LBに敗れた神経大クラブのフォワードに、賀川兄弟の名前がある。

戦争が終わってとにかく死なずに帰ってきて、再びサッカーをやり始めたころです。(中略) 指定の夜行列車に乗ったら乗客が多く、みんなデッキまではみ出していました。デッキで立ち寝してもあるいはデッキに横になって寝てもいいのですが、お客さんの赤ちゃんが夜中泣き出してですね、みんな立ったまま東京までやってきて、関東協会の乗富理事長のお宅に泊まりました。理事長には非常に歓待を受け、そのお宅では久しぶりに仲間とサッカーの話ができて、みんな骨抜きになってしまい、試合に来たのか分からないような様子になったのですね。

そして試合会場である東大に行って、いきなりキックオフです。(中略) いきなり則武と名越が足を痛めてピッチを出てしまい、9人になりました。9人になれば、いくら私の兄の賀川太郎がひとり頑張ってもいい加減な試合になってしまい、結局6-2で大敗しました。以来、東大とは相性が悪く、その後、朝日招待で対戦した際もたくさん点を入れられて負けてしまいました。

大敗はしましたが、当時の状況としては、みんな戦争から帰ってきたばかりで、嬉しかったのです。文科系の大学ですからね。早稲田や東大でしたら理科系の学生も残っていましたが、ほとんどみんな兵隊から帰ってきて初めて顔を合わせて、サッカーの話を一晩中できるものだから。一晩中サッカーの話をし、まったく戦闘意欲に欠けた試合をしてしまいました。我ながら「いやあ、もったいないことをしたなあ」と思っております。まあそれでも、東大の縦の強さというか、そういうものはよくわかりました。

わかりましたけど、「なんでこんな狭いグラウンドで試合せにゃならんのだ！」というのは当時の一番の感想でしたね。
(公開シンポジウム2016報告書より)。

この試合の前座で、中等学校の東西王座決定戦が行われ、東京高師附属中が1-0で神戸一中に勝った試合のことも『天皇杯65年史』に紹介されている。シンポジウム会場には、当時の附属中監督(学生監督)であった小栗純二氏が来場されており、コメントをいただいた。

このほか、YC&ACの細貝貞夫氏からは、開国後の尊王攘夷の時代に日本にやってきた外国人が、自分たちの愛するスポーツに文字通り命を懸けて取り組んでいた様子が紹介された。茗友サッカークラブ会長の松本光弘氏からは、創部120周年事業を通して大戦前の日本サッカーの様子が明らかになってきたのは大きな成果であると語られた。

終了後の懇親会では、東京高師蹴球部OBの張希飛氏の御息子が紹介され、「中国人の父がなぜ東京高師にいたのかがわかった」とコメント。またベルリン五輪代表チーム主将の竹内悌三氏のご長男である竹内宣之氏(東京教育大附属OB)が「二人の息子には附属でサッカーをさせる」との父の遺言に沿って附属でサッカー人生を歩んだことが紹介された。竹内氏と松本光弘氏は同世代で、全国大会の関東予選で東教大附属高と浦和高が対戦した試合があるとの話で盛り上がっていた。

当日参加できなかったが、シンポジウム前日に筑波大学名誉教授の後藤邦夫氏が中塚を訪ねて来られた。後藤氏は筑波大学女子サッカー部の部長を長く務められた方で、附属高校71回卒業生でもある。この日はあいにくお会いすることはできなかったが、後藤岩夫氏の「昭和13年度 関東蹴球協会客員章」を事務室に預けていかれた。後藤岩夫氏は戦前最後の東京高師蹴球部長。後藤邦夫氏のお父さんがその方だった。

戦後最初の蹴球部長は阿部三亥氏。その息子の阿部生雄氏も筑波大学附属中学校長・附属学校教育長を務めた方で、附属高校72回卒業生。後藤邦夫氏とともに東京教育大学体育学部で学生時代を過ごされた方である。戦前戦後の蹴球部長がいずれも附属OBの父親だったことに驚いた。

思わぬ人のつながりを楽しむことができたシンポジウムであった。

シンポジウム後は同会場で懇親会。安藤裕一氏の進行で、参加者全員からコメントをいただくなど、和気あいあいとした雰囲気です。年末の夜を楽しんだ。遠山諒、春日大樹、大河原誠二の諸氏が裏方として力を発揮してくれた。

3) シンポジウムの運営

運営面での振り返りを行った。主に話題になったのは「報告書の販売」と「告知」についてである。以下、やり取りの形で記録にとどめる。

岸：シンポジウム報告書のバックナンバーを1冊500円で販売してしまったのはミスだった。

中塚：法人化する前の報告書は無料で配るつもりだった。NPOになる前の資産については引き継ぎを終えている。これを販売するのはNGではないか。

茅野：旧サロンの資産を引き継いだのはもちろんだが、以前の報告書が売れた場合、収入に計上してよいのではないか。古新聞と同じ。資産として管理はしないが、売ればそれは収入になる。

笹原：販売するものではないが、売れば雑収入として計上する。

中塚：過去の報告書を改めて読むとすごく面白いしよくできている。しかしいっぱい残っていてもつたない。何とかしたい。

笹原：今回ものすごく告知した。メディアへの露出はどうだったか。何人かの記者にも来ていただいたが、どこかに載ったのか。

中塚：「体育施設」という雑誌に、大きくはないが紹介された。

岸：これまでの登壇者や参加者を見ると、いまあまりいらしていない方が大勢おられる。最近来られていない方が集まるようなシンポジウムが、20周年でできるとよい。

中塚：この20年間で関わった方が来られるようなシンポジウムができるとよい。鈴木崇正さんとか…

茅野：高橋義雄先生もずいぶんかかわっていたのですね。

中塚：高橋義雄さんには副理事長をやってもらったこともある。中核メンバーだった。

笹原：横浜でよく行く飲み屋があって、マスターは横浜サッカー協会の事情通。その人が今回シンポジウムに来てくれた。辛口の彼が言っていたのは、「あれは筑波大の同窓会の集まりだな」ということ。あとその人が言っていたのは「1,000円なら出すけど2,000円は高い」。

中塚：交通費をかけて来る人にとってみれば高いと感じるかもしれない。月例会が1,000円。それよりも高くという程度の設定だが。

笹原：何とかして事前に、サロンのメディアだけでなく公共のメディアで告知できればと思ったが。

春日：facebookに有料の告知がある。お金をいくら払ってキーワードを設定すれば、ランダムに「あなたにおススメの記事」というのがタイムラインに出てくる。いま若い人を捕まえるのだったらこの方法は有効。「いいね」を押すとさらにその友達に飛ぶ。いまのページで3,000人ぐらいリーチしているが、これを使えばもっと広げられる。

小池：1200円で9万人。ターゲットを選ぶこともできる。年齢や地域も選べる。

中塚：「ふーん」としか言いようがないな。

小池：サッカーダイジェストは広告を出してもらえる。

中塚：今回の参加者は70名あまり。72人。これまでに比べれば来た方か。けど目標は200人だった。もっと人を集めて盛り上げたい。

4) 報告書について

報告書編集長の春日大樹氏から、3月中の発行を目指して「がんばります」との意思が表明された。

シンポジウム編は、当日参加していた筑波大生が鋭意進めているが、寄稿編の執筆者が決まっておらず、意見交換した。後藤邦夫さん、竹内宣之さん、YC&ACの細貝貞夫さん、東京高師OBの張希飛さんの御子息（張寿山さん）が候補として挙がり、打診することとなった。

3. これからの「公開シンポジウム」

2017年度については「サロン2002の20年を語ろう（仮題）」と題して、日本のサッカー界、スポーツ界の劇的変化と、その中でサロン2002そのものがどう変化してきたのかについても取り上げたい。この場でも少しだけ意見交換した。

中塚：来年度のシンポジウムは、名称はともかく、おおむねテーマは決まっています。あとは時期や会場ですね。

笹原：「サロン2002の20年を語ろう（仮題）」だと内向きな印象がある。

中塚：もちろんサロンの内側のことを取り上げるだけではない。むしろこの20年に起きたさまざまなことを幅広く取り上げたい。いいキャッチコピーを考えよう。6月の月例会が第250回になるのでその前後、夏休みぐらいか。けど去年やったように年末も悪くはない。

春日：あまり年末に近づくとJのいろんな日程と重なって動きにくい。

中塚：9時を回ったからこのあたりの話は場所を変えてやりましょうか…

(続きは「景宜軒」にて)